

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

主の御用

——マルコ伝第11章1～26節——

小池辰雄

1965年3月14日

無礙の一道 来臨者 エルサレム入城 依行 主の御用 葉のみの信仰 祈りの家 無私の祈り 神の信を持て キリストの心を入れる キリストは最高の靈 すでに得たりと受けとれ

【マルコ11・1～26】

¹彼らエルサレムに近づき、オリブ山の麓なるベテバゲ及びベタニヤに到りし時、イエス二人の弟子を遣さんとして言い給う、²『むかいの村にゆけ、其処に入らば、やがて人の未だ乗りたることなき驢馬の子の繫ぎあるを見ん。それを解きて牽き来れ。³誰かもし汝らに「なにゆえ然するか」と言わば「主の用なり、彼ただちに返さん」といえ』⁴弟子たち往きて、門の外の路に驢馬の子の繫ぎあるを見て解きたれば、⁵其処に立つ人々のうちの或者『なんじら驢馬の子を解きて何とするか』と言う。⁶弟子たちイエスの許に牽ききたり、己が衣をその上に置きたれば、イエス之に乗り給う。⁸多くの人は己が衣を、或人は野より伐り取りたる樹の枝を途に敷く。⁹かつ前に往き後に従う者ども呼わりて言う『「ホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて来る者』¹⁰讃むべきかな、今し来る我らの父ダビデの国。「いと高き処にてホサナ』¹¹遂にエルサレムに到りて宮に入り、凡ての物を見回し、時はや暮に及びたれば、十二弟子と共にベタニヤに出で往きたもう。

¹²あくる日かれらベタニヤより出で來りし時、イエス飢え給う。¹³遙に葉ある無花果の樹を見て、果をや得んと其のもとに到り給いしに、葉のほかに何をも見出し給わず、是は無花果の時ならぬに因る。¹⁴イエスその樹に対いて言いたもう『今より後いつまでも、人なんじの果を食わざれ』弟子たち之を聞けり。

¹⁵彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その内にて売買する者どもを逐い出し、両替する者の台、鴿を売るものの腰掛を倒し、¹⁶また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給はず。¹⁷かつ教えて言い給う『「わが家は、もうもろの國人の祈の家と称えらるべし』と録されたるにあらずや、然るに汝



らは之を「強盜の巣」となせり』¹⁸祭司長・学者ら之を聞き、如何にしてか
イエスを亡さんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。
¹⁹夕^{ゆうべ}になる毎に、イエス弟子たちと共に都を出でゆき給う。

²⁰彼ら朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見る。²¹ペテロ
思い出して、イエスに言う『ラビ見給え、詛い給いし無花果の樹は枯れたり』
²²イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移
りて海に入れ」と言うとも、其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑
わずば、その如くなるべし。²³この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、
すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。²⁴また立ちて祈るとき、人を怨むる
事あらば免^{ゆる}せ、これは天に在す汝らの父の、汝らの過失を免し給わん為なり』
〔²⁶なし〕

●無礙の一道

今、司会者が言いましたように、今日はイエスの受難週間の第一日というわけです。一
週間が本当に一週間かは、ちょっと分かりませんけれども、大体、そういうように数えら
れているようです。エルサレム入城ということはルカ伝9章51節を見ると、ガリラヤから
エルサレムへ前進されるときに、

「⁵¹イエス天に挙げらるる時満ちんとしたれば、御顔を堅くエルサレムに向け
て進まんとし」（ルカ9・51）

と書いてあります。「無碍の一道」という言葉があるが、イエスはこのエルサレムへの無碍
の一道を進んで来られて、かたく眼をエルサレムに向けて、先頭をきつて前進されたわけ
です。昔の侍も、武将が馬に乗つて先頭をきつて突進していく。この頃は、後ろの方でい
ろいろやつてているのですが、昔の侍は先頭をきつて行くことがしばしばあつたわけです。
イエスもそのように、この場合は全く先立つて前進された。ある場合にはイエスは、本當
にしんがり的な存在ですが、またあるときは先頭である。しんがりであるということと、
先頭をきるということは実は一つなんです。

「我は始めにして終りなり」

と言われますが、態勢からいつても、全軍をその先頭とまたしんがりにおいて掌握してい
るような在り方です。けれども、キリストの進軍は結局、最後は彼一人です。預言書にも
言われているとおりに、後でみな羊たちは牧人^{ひつじかい}を棄てて——ゼカリヤ書13章に書いてある
とおり——散つてしまふ。それはもう既にキリストは御存知です。しかし、やがて本当の
神の戦にたずさわるところの後続部隊は、イエスが天界に行つてから本当に始まるので、
散つたと思つた使徒たちがはじめて目覚めて、今度は本当にキリストに付き従つていくこ
とになる。そういう凄い見通しをつけたところのキリストの前進です。そういう勝ち戦の、



いよいよ敵の本城エルサレムに今、立ち入るという場面です。

●来臨者

これはマタイ、マルコ、ルカ、みな同じような記事が載っていますが、いちいち比較しませんけれども。

オリーブ山の麓なるベテパゲ及びベタニヤに到りし時、

なにかこの言い方がちょっとおかしいので、学者が頭を悩ますわけですが。地理的にいうと、ベテパゲはエルサレムの東南にあたる。ベタニヤはもつと東の方になるわけで、ちょっと順序が逆みたいな、はつきりしないわけです。しかし、要するにオリーブ山の麓の近所に来られたということは間違いない。ベタニヤは、時々ここにまた戻って来られては宿つた所です。

**イエス二人の弟子を遣さんとして言い給う、²『むかいの村にゆけ、
「むかいの村」というのが何だかわからないので、これがベテパゲではないかなんてことを言いますが、どうでもいいです。**

**其処に入らば、やがて人の未だ乗りたることなき驢馬の子の繫ぎあるを見ん、
それを解きて牽き来れ。³誰かもし汝らに「なにゆえ然するか」と言わば「主の用なり、**

今日は、「主の御用」と題したのもこの言葉によるわけですが、

彼ただちに返さん」といえ⁴弟子たち往きて、門の外の路に驢馬の子の繫ぎあるを見て解きたれば、⁵其処に立つ人々のうちの或者^{ある}『なんじら驢馬の子を解きて何とするか』と言う。

マタイ伝の方がもう少し詳しく書いてある。まだ人が乗つたことがない驢馬の子というのは、ゼカリヤ書9章に預言がある。

「⁹シオンの女よ大に喜べ、エルサレムの女よ呼われ。

「シオンの女」「エルサレムの女」という言い方は「シオンの市民たち」ということです。視よ、汝の王汝に来る。彼は正義して拯救を賜り柔和にして驢馬に乗る。即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり。¹⁰我エフライムより車を絶ち、エルサレムより馬を絶ん、

戦車や軍馬のことです。

戦争弓も絶るべし。彼國々の民に平和を論さん。その政治は海より海に及び河より地の極におよぶべし。」（ゼカリヤ9・9～10）

そういう、戦を終わらせ平和をもたらすところの君がやつて来る。この「来る」ということ。イザヤ書40章10節に、



「¹⁰みよ主エホバ能力をもちて來りたまわん」
という言葉がありますが、「來臨者」ということです。來臨者ということは、「メシヤ」ということ同じことなんです。マタイ伝の後の方に、

「ダビデの子にホサナ」

という言葉が出てくるでしょ。「ダビデの子」は即ち「メシヤ」です。ヘブライ語では「マーシアツハ」という。即ち、救をもたらすために来る者です。

●エルサレム入城

キリストはしばしば、透視をなさる。予見をなさつたり、距離的に透視がきいたり、時間的に将来のことの、要するにどつちにしろ空間的にも時間的にも見通しがきくわけです。この場合も、空間的な見通しがきいているわけで、望遠鏡によつたのでも、レーダーによつたのでもない。そういうつた驢馬の子がいるということがちゃんと見えてしまつた。そしてこれが、自分がエルサレムに入つていく時にちょうど、ゼカリヤ書9章の預言のごとくなつて、なんとも不思議なことです。民数紀略19章にも出ている。

³誰かもし汝らに「なにゆえ然するか」と言わば

乗つたことのない驢馬を、いきなり人にも断らないで、つないのである紐を解けば、人が疑問に思うわけですね。そうしたらば、
「主の用なり、彼ただちに返さん」といえ』
と。なにも盗むのではない。

⁴弟子たち往きて、門^{かど}の外の路に驢馬の子の繫ぎあるを見て解きたれば、⁵其処に立つ人々のうちの^{ある}或者『なんじら驢馬の子を解きて何とするか』と言ふ。
⁶弟子たちイエスの告げ給いし如く言いしに、彼ら許せり。⁷斯^{かく}て弟子たち驢馬の子をイエスの許に牽ききたり、己^{おの}が衣をその上に置きたれば、イエス之に乗り給う。

上衣を乗せて、鞍の代わりにしたわけです。裸驢馬ですから。

⁸多くの人は己^{おの}が衣を、或人は野より伐り取りたる樹の枝を途^{みち}に敷く。

結婚式のときには白布を引きますが、キリストの入城の時にもそういう道を備えるわけです。

⁹かつ前に往き後に従う者ども呼^{よば}わりて言う『「ホサナ、讀^ほむべきかな、主の

御名によりて来る者』

「ホサナ」というのは、「ホシュアナー」という「ヨシュア」という字が語源で、「救い」という字です。「救いたまえ」ということです。この場合はほとんどそれが讃美の気持で、「祝福あれ」とか「幸いあれ」とかいうことに使つていたらしい。これは詩篇118篇25、26節をちょっとお開きになつてごらんなさい。これはルターの非常に特愛した詩篇の一つで、向



こうの教会では結婚式のときによく引用する詩篇です。

「²⁵エホバよねがわくはわれらを今すぐいたまえ。エホバよねがわくは我らをいま榮えしめたまえ。²⁶エホバの名によりて来るものは^{みな}^{きた}福いなり。われらエホバの家よりなんじらを祝せり。」（詩篇118・25～26）

とある。この場合の「主」というのはもちろん「神さま」のことを言つてゐるわけです。

●¹⁰讃むべきかな、今し来る我らの父ダビデの国。「いと高き處ところにてホサナ!」

即ち彼らにはキリストの入城は、やがてエルサレムに君臨する王者であるというわけで、決して信仰的な宗教的な靈界の王者として彼らは理解しているわけではない。昔はダビデが理想的な王者であつた。そのダビデ以上の、「ダビデの子」と言うだけの、全世界を統治めるところの王者という意味で、みな非常に喜んでしまつたわけです。ところが、イエスはどうぞ全然そういう王様とは違う。

遂にエルサレムに到りて宮に入り、凡ての物を見回し、時はや暮すべに及びたれば、十二弟子と共にベタニヤに出で往きたもう。

いつへん入城式をやつてから、それからまた下りて行つて、またベタニヤに行かれたといふわけです。なにかちよつと芝居みたいですけれども、決して芝居でもないので、ちゃんとそういうような神さまの深い摂理のもとにこうなつたわけです。

● 依行

今読んだところの、むしろ主なことは、イエスが入城されて、非常にみんなが喜んだ。そして、讃美を歌つたということがこの記事の重点なんでしょうけれども、今日は、私はちは特に

「主の用である」

ということに焦点をあててみたい。キリストが自らそういうように彼らに命ぜられたわけです。

主の用を果たす者は僕である。即ち、主の命令による。命令ですから、それを果たす者は僕である。実は、イエス・キリスト自身が實に主の用を果たして行つた人です。主なる神の、父なる神の御用——御用学者だとか御用商人だとか、「御用」なんていうのはあまりいい言葉ではない。いわゆる御用学者みたいなことでは困りますけれども——言葉の一番根源的な意味において、神の御用を果たすために、キリストはこの地上に来られた。神の命令、神の意志をもちろん行ずるためにです。

道元の言葉には、

「^{いぎよう}依行」

という言葉がある。「帰依して行ずる」ことを依行という。仏教でいうと、禅宗の道元また法華経の日蓮というのが仏教の世界で相当——特に日蓮がその点で強かつたと思うけれど



も——依行の行の世界です。行ずるということ。あの二人は意志的な坊さんですね。法然、親鸞となると、これは心の方です。心の世界。道元や日蓮の方は行の方の性格が強い。

イエスはどちらももちろん深く持つておられる。大雑把にいようと、仏教とキリスト教どちらが行的かというと、キリスト教の方が行的なんです。だから、文化を推進させる創造力を持つている。創造的な力を持つている。

キリストは、

「汝の意志を成してください」

と祈られた。「汝の御意を——「こころ」というのは意志の「意」ですが——成してください」と。即ち、

「この私を通して成してください」

ということです。即ち、神の意志を人間は——行動的にはこの意志の面が根底になるのですが——その汝の意志をこの私を通して成したまえという。私はその意志を成就する。そういうように全身を投じている。ただ行為と言っているのではなくて、全身をもつてするところの行、行うというのが即ち、

「主の御用に立とう」

というこの意志です。

近代人は、

「自由意志」

と言いますが、非常に自由を尊重するわけです。戦後、日本人は民主主義的な自由というものをだいぶ新しく取り入れてきたわけですが、それが本当の自由でないものですから、今はどうもだいぶ太平ムードです。本当の行がなかなか展開しない。またバラバラである。今朝もテレビでやっていたけれども、北朝鮮や中国が、これはいわゆる全体主義的な傾向がもちろん強いわけですけれども、よかれあしかれ、とにかく非常に国民的に今、行動的に力強く推進しています。非常に行動的にすべてが合理的に動いている。それに比べると、

「自由、自由」

と言っている日本人はなにか太平ムードで安閑としている面がだいぶあります。冷静に省みて、とにかく憂うべき事態であると思う。彼らの人間中心であるところの、ひとつこの国家の目的のための行となれば、ああいう全体主義は非常に力強く動いていく。まあ、個人の自由の問題は別問題としましてですよ。

けれども、本当に自由をもちらがら、そして、本当の行為ということが出てくるためには、正にこの「依行」という言葉が表しているように、

「神に依り頼んで、神の力をいただきながら行く」

ことです。ただ意志と言つたつてしまふがない。ただ神意と言いましても。そこに大事な消息があるわけです。キリスト教会で、



「汝の御意を成させたまえ」

と、みんな主の祈りで祈っている。無教会は、ある意味において、かなり意志的な信仰であつて、一応、はりがあるように見える。けれども、本当の行はやはり展開しない。本当の行が展開するためには、神の意志を本当に受けとるためには、やはり神に本当に依存する——「絶対帰依」という言葉がありますが、この「帰依する」ということ——この帰依が、パウロが言つているところの

「キリストの中に」

という世界です。

キリストの中に自分を本当に取り入れる。キリストと一つになる。とにかく、

「存在的、生命的にキリストと一つになる。キリストの生命を自分が今いぶいているのだ」

というときに初めて今度は、

「何を為すべきか」

という問題にかえつてくる。「汝の意志を」と言つて、今度はその力が、生命が来てますから、その行が正に依行として展開するわけです。依行的な展開をする。

● 主の御用

本当にイエス・キリストは神と一つで、

「われと父とは一つなり」

という。そして、「主の御意を」と言うときに、御意がただ理解されているのではない、思われているのではない。直ちにそれが行動にあらわれてくる。

言葉でもそうです。御言を受けて、その言葉を発するときに、その言葉が力をもつていて。靈言である。こういう世界になつてくると、もうこの「信・行」は決して分裂しない。我々の信仰の健全なる構造、また実質あるところの内容というものは、そういつたものでなくしてはならないわけです。「主の御用」と言いましても、いわゆる私たちが歴史的に聞いているような御用というような、そういうことをでなくて、本当にそこに投じていている。

とにかく、日本の昔の武士とか、あるいは日本の軍人は、君命のため、主君の命令には全く水火も辞せずに入り込んで行つた、あの気合は確かにそういつた意味において、本当に相手に自分を全託して、信頼して、喜んで進んで行こうという気魄があつたわけです。それが今はなくなつてしまつた。この頃少し、それだからか何か知らんけれども、テレビでだいぶああいう武士のものをやつしているけれどもね。

私たちは、福音の世界でなければ、自分には本当の自由がない。自分の自由では行き詰まってしまう。グッと上から来るところの示し、力、御言、それに従つて進むところには、本当の御用の自覚と共に、それが本当の自由である。本当の自由意志である。何ものにも



囚われない。神さまに、キリストに囚われるとは、何ものにも囚われないということで、自分にも囚われない。

自己に囚われたところのものは決して自由ではないですから。一番これがやっかいなんです。自己に囚われない。自我というものに囚われない。我執というものがなくなるわけです。この自我、我執がとれてしまう。普通は、自由が我執的な自由であるけれども、これがとれてしまつたというわけです。

「汝の意志を」と、そこにキリストの力と、キリストの実存の喜びがある。パウロがまた、

「我は主の僕」

と言つた。あの

「一切の秘訣を得たり」

と言つたパウロは、「主の僕」と言つて自らを自覚しているところのパウロです。使徒たちの中でも一番行動的なのはパウロですが、そのパウロが正に僕として自覚したことによつて、本当に

「御靈のあるところに自由あり」

と言つて、示されつゝ伝道して行つた。マケドニアの方に行こうと思つたらば、御使が夢の中に現れてきて、

「マケドニアの方に行くな。ギリシャの方に渡れ」

というようなことも、みな、御用とあつてそちらの方へ出掛けで行つたわけです。小アジアの方をひとわたりもつと伝道したかつたと、自分の意志はそう思つたかも知れないけれども、

「いや、西へ進め」

というわけです。

これが本当に、私たちが「主の御用」という言葉を、自分の生涯の使命として、

「私の御用は、生涯をかけての御用は何であるか」

と。何を営んでおりましても——また営むことが時々変わるでしょう——とにかくそれが御用であるならば、やつていることが変わつていきましても、それは姿としては全部、一貫しているのです。そのようにして、展開また展開していく。またそれがある一つのことにつつと、事柄としても貫く場合もあります。とにかく、どのようなわけであつても、この「主の御用」という自覚が本当にあるときに、一番それが強いわけです。これが神の栄光を現していくところの行動的な在り方になる。

悟り澄ました世界だとか、ただ思われている世界だとかということではなくて、発現していく、体現していく。どうしても、この体現者ということが大事です。体現、発現していく。これはみな、何を体現するかというと、神の栄光をです。だから、「ホサナ」である。
「讃ほ
「讃むべきかな」



と。ホサナという言葉は、さつき言いましたように、

「助けたまえ」

という言葉ですけれども、この「助けたまえ」が、栄光の讃美の言葉に変わっているわけです。

「主の名によつて來たる者に神の助けあれ」

という氣持がもちろん讃美の中にあるでしようけれども、「神の助けあれ」ということと同じに、そこに

「栄光あれ、祝福あれ」

ということが派生して、だんだんそつちの意味の方に移つていつたということです。

●葉のみの信仰

¹²あくる日かれらベタニヤより出で來りし時、イエス飢え給う。¹³遙に葉ある無花果の樹を見て、果をや得んと其のもとに到り給いしに、葉のほかに何をも見出し給わず、是は無花果の時ならぬに因る。

これは「ニサンの月」というので、今の四月ですからね、無花果が実る時ではないわけです。エルサレム入城がいわゆるニサンの月の十日とされていていますけれども。

¹⁴イエスその樹に對いて言いたもう『今より後いつまでも、人なんじの果を食わざれ』弟子たち之を聞けり。

少し後の方にいきますと、20節のところに、

²⁰彼ら朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見る。とある。無花果の木に向かつて、

「今より後いつまでも、人なんじの果を食わざれ」

と。ちょっと、キリストも乱暴なことをおつしやつたようです。キリストがその時におなかが空いていたから、無花果の実を食べたかった。けれども、葉のほかは何もなかつた。そして、この無花果の木を呪われたところが、枯れてしまつたという。何か妙なことですけれども。

要するに、私たちが今読みますと、それは葉っぱばかりの、葉ばかりの人間ではダメだと。実がみのらなくては。信仰が葉っぱばかりの、ちょっと葉までは出るけれども、春になつて葉は出るけれども、花が咲き実が稔るということにならないような、立ち消えになつてしまふような、そういう信仰。それは要するに、神の生命を、キリストの生命をうちにいただかなければ、この信仰が葉っぱだけのもので、いわゆる観念信仰というのがこれです。いわゆる御利益信仰にしたつてそうです。御利益でも觀念でもないところの本当の信仰は、さつき言つた「依行」の角度の、御意を行づる角度の信仰です。行することそのことが既にこの実であるわけです。



「御意を行ふ者のみが天国に入ることができる」と。

神の御意を行ふ者即ち、神の命を、キリストの命をいただいて、そこに体現する者。体現するというのは、現ずるということですから。何が現ずるかと云ふと、実が現ずるわけです。

今、自然現象においては無花果は実がみのらない時であるのに、キリストが特にこういうことをそこに示されたということは、事実をもつて示されたということは、

「いかに葉のみの信仰ではダメか」

ということを、私たちはここで読みたいと思う。そのことは同時に、キリストはこの力ある業を行われたわけですから、それで直ちに、この後の方で、

²²イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。²³誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移りて海に入れ」と言うとも、其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑わずば、その如くなるべし。²⁴この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。²⁵また立ちて祈るとき、人を怨むる事あらば免せ、これは天に在す汝らの父の、汝らの過失を免し給わん為なり』

とおつしやつた。一番終りの句はマタイ伝の主の祈りの近所のところと非常に似ておりますけれども。木に命じても木は枯れるということから、キリストは、

「信じて疑わば必ず成る」

ということをそこに言われたわけです。信仰のことを語られたキリストの言葉のうちの最も大事なもの一つであると思います。

●祈りの家

しかも、そのことは、またその前の15節の、

¹⁵彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その内にて^{うりかい}売買する者どもを逐い出し、両替する者の台、^{はと}鴿を売るものの腰掛を倒し、¹⁶また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免^{ゆる}し給わず。

これは近道をしようと思つて通るやつなんです。

¹⁷かつ教えて言い給う『「わが家は、もうもろの国人の祈の家と称えらるべし」イザヤ書56章の言葉ですが、

と録されたるにあらずや、然るに汝らは之を「強盜の巣」となせり』¹⁸祭司長・学者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。

と。このところでいわゆる宮潔めのことが出てきているわけで、ヨハネ伝では宮潔めのことが始めの方に出ていますが。

「売買する者を逐い出し、両替する者の台、鴿を売るものの腰掛を倒した



と。キリストが、神殿を祈りの家とされた。いつもキリストは外側を内側から満たしておられるので、キリストにとつては、泉のほとりであろうと、野原であろうと、山の中であろうと、あるいは、こういった神殿であろうと、どこでもキリストが祈るところ、即ちそれが祈り場である。

私たちはいざこにおきましても、これが祈りの場である。私が「幕屋」と申しているこの幕屋は——正に「出会いの幕屋」という言葉が旧約聖書にあるとおり——いたる所が幕屋であり、祈りの場である。無教会は、

「洗礼、聖餐は要らない。教会組織は要らない」

と言う。その通りです。けれども、私は今まで無教会で、祈りのことを、キリストがまた使徒たちが新約聖書において非常に深い消息を語っているところの祈りのことを、無教会で強調しているのをまず聞かなかつたと言つていいだろうと思います。今、私は本当にそのことに気がつくわけです。

「無教会、無教会」

と言うけれども、一番欠けているものは祈りです。

無教会は研究をよくやりますよ。聖書の研究、ヘブライ語やギリシャ語。参考書を読んで、学者がどう言つたこう言つたと。微に入り細をうがつて、研究をやつている。けれども、この祈りが一番欠けている。一番欠けているなんて言つては悪いかも知れませんけれども。とにかく、みな立派なお祈りをなさいますよ。けれども、そんな立派な祈りとか何とか、そういうことではない。

私たちは、皆さんも、いいですか、私はこの集会も決して、その意味において、祈りの世界で非常に満足すべきところに来ていると思いません。どうか、皆さん、祈りの世界でもつともつと深くなつていただきたいと思う。それから、もつと単純であつていただきたいと思う。深いということと、単純ということとは決して矛盾しない。私は話の終りに、

「どうぞ、お祈りください」

と言うと、なかなか祈らない。どういうわけですか。もう遠慮はいらぬ。神さまの前に何を遠慮しているか。祈るということは、お互に誰が祈つても一緒になつて助け合つて、神の世界にキリストの中に入つて行こう、迎えようということなんで、キリストを迎えることをなぜ遠慮するか。どうか、その意味においてもつと単純に、子どもらしくあつていただきたい。それが一番大事なことなんですから。

今、集会所は即ち祈りの場である。私が語つっていても、皆さんは聞いていても、即ち一番大事な質は何かというと、祈り心です。祈りは福音の生命なんです。何をするにしても、祈りが非常に大事です。それは事実、自分でそういうように生活してみれば分かる。もう時間は短くたつて、長くたつて、それはいい。



●無私の祈り

祈りの世界では、無私になるんです。^が我を通すのではないから。キリストの、神さまの御意を、聖意を聴くんですから。いわゆる宗教的とか何とかということではなくて、その時に判断する、右すべきか左すべきかという時に、私心のない世界に入つて、そこでは透明な理のはたらきも、神の天的な法則、^{ことわり}理も働く。それから一番大事な質は愛ですから。そういうものが渾然として——分析はできませんけれども——動いていく。そして、それを聴けば、その無私的な、そして本当の道理を、道を——

「我は道なり」

という——この道理が、本当の天道が、天理が——天理教ではないけれども——靈法が、豊かな深い愛の心情のもとに動いていく。そこには間違いがないはずです。人間だから、また実際、相対的な現実では、右しても左してもいい場合がある。

祈りが非常に大事なわけです。本当の確信とか、本当の豊かさが来る。祈りは自分の何かではないんですから。これはいつも神さまの、キリストの生命が、自分の中に来ることですから。それで力が来る。いわゆる観念的な祈りだつたら、いくら祈祷会なんでものをやつてみたところで、いわゆる教会でも、いわゆる無教会でも、幕屋にしたつて、その点を怠つたらダメですけれども。皆さん的生命は何にあるか。祈りにある。自分の全存在が祈り的であるということ。

キリストが入城されて、真先に祈りの事態に、まるで神殿をひっくり返すように、非常にここで怒られた。キリストの聖なる憤り、聖憤です。聖憤の事態は一体何であつたかと、いうと、祈りの場を汚したことである。これは

「聖靈に逆らう罪は赦されない」

とありますから、この祈りの世界をなくしてしまう世界はダメです。どんなに良さそうでも、これはダメです。聖書をお読みになるときに、読むこと自体がもう既に祈りなんです。聖書を読んで、御言が自分の中に化^{かたい}してくるように読むということは、祈りがなければ化体してこない。祈り心で読まないと、^{からだ}体に化してこない。

「わが言は靈であり、生命である」

といふんですから。御言は、聖書の言葉は靈であり生命であるといふんですから、靈であり生命であるものを受けとるのは、祈りのアンテナによらなければ、受けとれない。そういう意味において、私たちはいよいよ深く、単純率直に、また深く祈りの皆さん一人ひとりでありたいと、また祈りの集会でありたいと思うわけです。

●神の信を持て

²²イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。』
と。ギリシャ語を直訳すると、



「神の信を持て」

と書いてある。「神を信ぜよ」というのは、

「神の信仰を、神の信を、神信を持て」

と書いてある。おそらくヘブライ語では、「エメツ・ヤーヴエー」「神のまこと」という言葉です。「まこと（真、信、誠）」という字は「アーメン」という字の元です。「まこと」という字は、漢字でどの字を書いてもいいが、「誠」というのは、神の言は成るんです。神の言は必ず成る。

「神の信を持て」というのは、

「神のまことを持て」

ということ。神は実現なしたものとこの、実現実行なさるところの方です。また、神さまは私たちに対し裏切らない。人間はひとを裏切つたりするけれども、神さまは裏切らない。

「神の信をいただけ」

ということです。素晴らしい言葉だね、この「神を信ぜよ」というのは。

「神の信を持て」

ということです。

「在りて在らしめるもの」

は、「在らしめて在るところのもの」、それが本当の真実（信実）な存在である。思うことと為すことが、内と外が表裏してしまうものは真（信）ではない。内外が一如である。これが真（信）の世界だね。それが「まこと」の世界です。内も外もない。内は外であり、外は内である。これがまことです。言葉では、

「巧言令色、鮮なし仁」

なんて、孔子が言っているけれども。「まことしやか」なんていうのが一番いかん。即ち、内外が相即していること。

政治の世界だって、結局は一番の力強い政治はそれなんです。政治家とか外交官なんて、そういうひとつのかみな、内外の巧みになるけれども。一番本当のものはやはり、グラン・ドストーンだとか、リンカーンだとかいうような人を見ていると、ケネディーもそうだったと思うけれども、やはり人間を本当に動かすものは、偽りなき世界です。

そういうふた神の信を持つ。そういうふた神の心。神心、仏心です。

みなもとさねとも

源

実朝の、

「山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも」

(たとえ、山が裂けくずれ、海の水が干あがつてしまうような世の中になつても、大君に

対して一心を抱くようなことはけつしてありません。)

とある。即ち、これは一心のないこと。実朝というのは素晴らしい歌人でもあり、そういう



つた深い心をもつた人でしたね。

「神といひ仏といふも世の中の人の心のほかのものかは」

（神といひ仏といつても、それらはみな人の心の中にあるのであって、どこかほかのところにいるというわけではないのだ。）

と。即ち、我々の心は神に通ずると言つたつていい。我々の心というものはみな、もともと神の子なんだから。仏教の方では

「ことごとく仮性あり」
〔ぶっしょう〕

という。要するに、心は本当は無心の心である。心無き心が本当の心である。そういう心が、本然の心は神仏に通ずるわけです。それを「至誠」という。真心まことという。誠心という。ちゃんとそういう言葉ができている。

藤井先生が、「眞実、眞実」なんて言つたのも、そういうふた氣持もありになつたわけです。けれども、いわゆる「眞実」なんて言つて何か凝り固ると、変なことになつてしまつ。むしろ、そういうふた無心のこころです。私はどうも、ああいう「眞実」というようなことを無教会であんまり言うから嫌になつてしまつたんだ。あの眞実という言葉で、人を審くようなことになつてしまつ。それよりか、八方破れで、無心で、何もない。何もありませんよ、私は。空無である。空であり無であるところの心だね。空であり無であるような心。そこにこの神の心が宿るから。その神の心はまことの心で——天真爛漫というけれども——正にこの「天真」なんです。天真という言葉の方がよっぽどいい。この天真です。そういうふた天真の神の心を、神の信を、誠を、神のまことを、神の真心を持てということです。

だから、一番大事なのは、「神を信ぜよ」という言葉の内容なんです。

「キリストを信ぜよ」

とは、

「キリストの心を持て」

ということです。持てますよ。無条件にいただくんです。これは十字架だから。十字架でもつて、この私心がぬけてしまつた。私心が十字架でぬけてしまつていてるんだ。だから、

「無条件に受けなさい」

と。「はいっ」と言つて受けとる。これは祈りですよ、その世界は。十字架を受けとるのもこの祈りです。自分がはずれてしまつた。神の、キリストの心をいただくのも祈りです。キリストも正に、

「われ何ごとをも為しあたわす。何ごとをも言えず。何ごとをも教えず」

と言われたキリストは神の中に深く入つて、神の一切のものが入つてきた。それが「神を受けとれ」ということです。

「神を信ぜよ」

は要するに



「神を受けとれ」

ということ。

「キリストを信ぜよ」

は要するに、

「キリストを受けとれ」

ということです。キリストの本願を汝の悲願とせよと。それが大前提ですから。それを受けとつたら、今度は発するぞと。

●キリストの心を入れる

23誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移りて海に入れ」と言うとも、其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑わば、その如くなるべし。

と。

「それでは俺は途方もないことをひとつ考えてやろう」
なんて、それはダメですよ。そんな無法なことを言つたつて。キリストはそういう乱暴のようなことをおつしやいましたけれども。あんまり信仰がないから、少し凄いことをおつしやつたけれども。この

「山に移りて海に入れ」

とは、

「お前の心を取り出して、キリストの心を入れる」

ということですよ。

「必ず成る」

という。必ず成る。山が移つてどうのこうのなんていうことよりも、一番素晴らしい変化は何かというと、我々の心がキリストの心と変えられる変化。これは最大の変化です。心を回らす「回心」というけれども、それはただごとではない。パウロのあの義がキリストの義で変えられたでしょ。

「わが義にあらず、汝の義が」

と。キリストという義がパウロに——パウロの義が棄てられて、塵芥ぢりあくたの如くになつて——キリストという義が彼の中に住んできたら、あの大使徒パウロとなつた。我々は器は小なりといえども、同じことが我々の中で起こる。それは「山が移る」どころの騒ぎではない。もつと素晴らしい変化です。原始力的な変化です。原始力的な変化が我々の心の中に起こる。これが起こつたら、皆さん、「もう、何をか」というわけです。それは本当の信です。

「神の信を、キリストの信を受けとれ」

とは、自分のものをしまつておいて受けとつたつて、それはダメですよ。そんなものは放り出さなくては。自分のものは放り出して——十字架でもつて放り出されるんだから——



放り出されたら、ちょうど核分裂だか何だかしらんけれども、新しい核が、靈核が入つてきたら、それはもう大革命ですよ。これが即ち、聖靈のバプテスマということです。だから、

「聖靈のバプテスマをそこに起こせ。しかば、お前は、心に信じて疑わずば、必ず成る」

と。疑つたり恐れたりしたらダメだ、必ず成ると。

●キリストは最高の靈

こないだ、ある人が集会にいらつしやた。相当、仏さんの世界で、觀音さんの世界で本当によく祈る人です。ちょっと祈り三昧になりすぎるくらいに祈る。けれども、お稻荷さんか何かが、狐の靈が災いした。の方は非常に祈りの深い方なんです。けれどもちよつと、相手が悪かつた。お稻荷さんみたいなやつがじやましていた。家の中にもお稻荷さんがあつたらしいね。日本はとにかく、百鬼昼行ですからね、「夜行」でなくて。いろんな神さまがか何だかしらないけれども、いろんなのがありますから。それで、行き詰まつてしまつたから、飛行機で飛んで来られたわけです。私の名前が、祈つていたら出てきたそ�だ。

〔福音の証者小池のところへ行け〕

というようなわけで。そして、この集会にいらつしやつた。福音の世界に入った。それで、こないだぶつ倒れてしまつたわけです。私は狐がついているなと思ったから、窓を開けて、

「聖名によつて出よ！」

とやつたわけだ。これは福音書と同じなんです。そういう福音書と同じことが起きた。この人は福音の世界に入つて、もう毎日一時間以上、聖書を読んでいるそうですが。

キリストの靈によつて、本当に御言の中に祈りをもつて今度は入つてきたら、キリストは最高の靈ですから、何の恐れもない。

「心安かれ、我なり、^{おそれ}懼るなれ」

と。どうか、皆さんも、どういうことがありましても、どんなに惡靈が強くても、キリストにはかなわんですから。決して、ご心配なく。そのかわり、空念佛ではダメですよ。本当に心をこめて、

「主さま！」

と。この一言で、キリストを呼べば、他の靈は恐れる。靈の方が恐れて、苦しがつて出でいく。

キリストとキリストの御言は——聖書の御言をないがしろにしてはいかんですよ——御言と靈とは、靈と言は分かつことができません。あなた方は、いざという時には、聖書のただひとつ簡単な言葉が本当に力になりますから。その言葉の最後はもう「キリスト」だけです。「キリスト」という聖名だけです。



●すでに得たりと受けとれ

その中に入れば、必ず成る。現象面は、どういう現象面が表れてくるか知りませんよ。その時に自分が願っていたような現象が出てこなくたつていいぢやないですか。現象に囚われないように。自分を棄てて、キリストの御意を、神の御意を求めて、そして、祈つている願いは、たとえその時に明確に把握できなくても、必ず成つていきますから、それを信じて進んで行くことです。そうすると、必ずある時にははつきりと、内容的にも示されることもあります。ちょっと分からぬからと言つて、いい加減なところで諦めたりしたらいかん。祈り続けて、祈りぬくことが大事です。祈り続けることが大事です。それは自分の意志が成るのではないから。汝の意志に託しているんですから、それはもう率直に、遠慮なしに祈つてください。そして、究極のところはいつも、

「神さま、主さま、あなたの御意が成りますように」

ということです。そうすれば、それを聖靈は執り成して、善きに変えてくださる。そういう大安心感と喜びをもつて、信頼をもつて、どしどし祈りかかっていかなくては。

キリストがエルサレムに入城されて、それから一遍、ベタニヤに行かれたけれども、その次の日に、この二日目に、特に祈りのことをそのようにして言われた。このことと、第一日の御用とは正に一つなんです。その御用を本当に果たすためには、汝の意志を受けとるために、この祈りの世界が、かくもキリストが示されたところの、

「凡て^{すべ}祈りて願う事は、すでに得たりと受けとれよ」

ということです。完了ですよ。だから、祈りに力が入るんです。

「何々してください」

と祈つていて、

「いつ成るだらうか？」

なんていう氣持で祈つたつてダメですよ。「してください」と祈つている直下に、成つていることを確信しながら進んで行かなければ。始めはどんなに苦しくたつて、必ず祈りの終りにはもう讃美に変わる。詩篇を見たつてそうでしょ。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたもうか」

とやつてゐるかと思えば、終りの方では神を讃美している。詩篇22篇を見てください。

あるがままの姿を投げかけることが「まこと」ではないですか。行き詰まつていれば行き詰まつているまで、分裂してゐるならば分裂したまで、投げかけていけばいい。そうすれば、そのまゝことが、取り澄まさざるまことが通ずるんです。

「もつと、こつちの気持を整えてから、もつと聖書を読んでから、祈りましょう」

なんて言つたつて、そんのはダメです。では、おしまい。

